補足プリント:グラム・シュミットの直交化法について

大矢 浩徳 (OYA Hironori)*

 $\mathbb{K}=\mathbb{R}$ or \mathbb{C} とする. 本プリントでは \mathbb{K} 上の計量ベクトル空間においてグラム・シュミットの直交化法がうまくいくことの厳密な証明を与える.

定義. V を \mathbb{K} 上のベクトル空間とする. V に写像

$$V \times V \to \mathbb{K}, \ (\boldsymbol{v}, \boldsymbol{w}) \mapsto \boldsymbol{v} \cdot \boldsymbol{w}$$

であって、以下の性質 (i)–(iv) を満たすものが定まっているとき、V を計量ベクトル空間といい、上の写像を V の内積と呼ぶ:

- (i) 任意の $\mathbf{v}, \mathbf{w} \in V$ に対し, $\mathbf{v} \cdot \mathbf{w} = \overline{\mathbf{w} \cdot \mathbf{v}}$,
- (ii) 任意の $u, v, w \in V$ に対し、 $(u+v) \cdot w = u \cdot w + v \cdot w$, $u \cdot (v+w) = u \cdot v + u \cdot w$,
- (iii) 任意の $v, w \in V$, $c \in \mathbb{K}$ に対し、 $(cv) \cdot w = \overline{c}(v \cdot w)$, $v \cdot (cw) = c(v \cdot w)$,
- (iv) 任意の $v \in V$ に対し、 $v \cdot v \ge 0$ 、さらに、 $v \cdot v = 0$ ならば v = 0.

ここで、 $z=a+bi\in\mathbb{C}$ に対し、 \overline{z} は z の複素共役 a-bi である $(a,b\in\mathbb{R},i=\sqrt{-1})$. 特に、 $\mathbb{K}=\mathbb{R}$ のときは、複素共役をとっても変化しないので、無視して良い.

- 例. 以下に計量ベクトル空間の例を挙げる:
 - \mathbb{R}^n は

$$\begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix} := x_1 y_1 + \dots + x_n y_n$$

によって、ℝ上の計量ベクトル空間となる.

• \mathbb{C}^n は

$$\begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix} := \overline{x_1}y_1 + \dots + \overline{x_n}y_n$$

によって、ℂ上の計量ベクトル空間となる.この内積はエルミート内積と呼ばれる.

• 1 変数多項式の空間 $\mathbb{C}[x]:=\{a_0+a_1x+\cdots a_nx^n\mid n\in\mathbb{Z}_{>0},\ a_i\in\mathbb{C}\ (i=1,\ldots,n)\}$ は

$$f(x) \cdot g(x) := \int_{-1}^{1} \overline{f(x)} g(x) dx$$

によって、 \mathbb{C} 上の計量ベクトル空間となる. この内積は L^2 -内積と呼ばれる.

• \mathbb{K} 上の計量ベクトル空間 V の部分空間は V と同じ内積を用いることで再び \mathbb{K} 上の計量ベクトル空間となる。例えば、2 次以下の多項式全体のなす $\mathbb{C}[x]$ の部分空間 $\mathbb{C}[x]_{\leq 2}$ は上の $\mathbb{C}[x]$ と全く同じ定義の内積を用いることで \mathbb{C} 上の計量ベクトル空間となる。

 $^{^*}$ $e ext{-}mail:$ hoya@shibaura-it.ac.jp

定義. V を \mathbb{K} 上の計量ベクトル空間とする.

- $v \in V$ に対し、 $||v|| = \sqrt{v \cdot v}$ を v の大きさという.
- $v, w \in V$ に対し、 $v \cdot w = 0$ のとき、 $v \in w$ は直交するという.
- $B = \{u_1, u_2, u_3, \dots\}$ を V の基底とする. ここで,

$$m{u}_i \cdot m{u}_j = egin{cases} 1 & i = j \ \mathcal{O}$$
とき、 $0 & i
eq j \ \mathcal{O}$ とき、

が成立するとき,B を V の正規直交基底という.つまり,正規直交基底とは,各元の大きさが全て 1 で互いに直交するベクトルからなる V の基底のことである.

グラム・シュミットの直交化法はある (正規直交とは限らない) 基底から正規直交基底を得る方法を与えるアルゴリズムである。

- グラム・シュミットの直交化法 —

V を \mathbb{K} 上の有限次元計量ベクトル空間とし, $B=\{v_1,\ldots,v_n\}$ を V の基底とする.このとき,以下の方法で V の正規直交基底を得ることができる:

$$egin{aligned} u_1' &:= oldsymbol{v}_1, \ u_2' &:= oldsymbol{v}_2 - rac{(oldsymbol{u}_1' \cdot oldsymbol{v}_2)}{(oldsymbol{u}_1' \cdot oldsymbol{u}_1')} oldsymbol{u}_1', \ u_3' &:= oldsymbol{v}_3 - rac{(oldsymbol{u}_1' \cdot oldsymbol{v}_3)}{(oldsymbol{u}_1' \cdot oldsymbol{u}_1')} oldsymbol{u}_1' - rac{(oldsymbol{u}_2' \cdot oldsymbol{v}_3)}{(oldsymbol{u}_2' \cdot oldsymbol{u}_2')} oldsymbol{u}_2', \ & dots \\ \vdots \\ oldsymbol{u}_k' &:= oldsymbol{v}_k - \sum_{i=1}^{k-1} rac{(oldsymbol{u}_1' \cdot oldsymbol{v}_k)}{(oldsymbol{u}_1' \cdot oldsymbol{u}_1')} oldsymbol{u}_1', \ & dots \\ oldsymbol{u}_n' &:= oldsymbol{v}_n - rac{(oldsymbol{u}_1' \cdot oldsymbol{v}_k)}{(oldsymbol{u}_1' \cdot oldsymbol{u}_1')} oldsymbol{u}_1' - \cdots - rac{(oldsymbol{u}_{n-1}' \cdot oldsymbol{v}_n)}{(oldsymbol{u}_{n-1}' \cdot oldsymbol{u}_{n-1}')} oldsymbol{u}_{n-1}', \ & oldsymbol{u}_k := rac{1}{||oldsymbol{u}_k'||} oldsymbol{u}_k', \quad k = 1, \dots, n \end{aligned}$$

とすると、 $\{u_1, u_2, \dots, u_n\}$ は V の正規直交基底.

とし,

注意. u_1', u_2', \dots, u_n' の時点で、互いに直交するベクトルとなっている. 最後のスカラー倍はそれぞれのベクトルの大きさを 1 にするように調整する操作である.

グラム・シュミットの直交化法で正規直交基底が得られることの証明。まず、 $\{u_1',u_2',\ldots,u_n'\}$ が互いに直交するベクトルからなる V の基底であることを示す。

 $\{u'_1, u'_2, \ldots, u'_n\}$ が V の基底であること、特に各 u'_k は 0 ではないこと:

各 $k=1,\ldots,n$ に対し、 $\{u_1',\ldots,u_k',v_{k+1},\ldots,v_n\}$ が V の基底であることを k に関する帰納法で示す。 (k=n の時が欲しい主張であることに注意。)

k=1 のとき、定義より $\{m{u}_1', m{v}_2, \dots, m{v}_n\} = \{m{v}_1, m{v}_2, \dots, m{v}_n\}$ なので主張は正しい.

次に、 $k \geq 1$ で $\{u_1',\ldots,u_k',v_{k+1},v_{k+2},\ldots,v_n\}$ が V の基底であることを仮定して、 $\{u_1',\ldots,u_k',u_{k+1}',v_{k+2},\ldots,v_n\}$

がVの基底であることを示す。このとき、 $oldsymbol{u}_{k+1}'$ の定義より、これらの関係は行列の積の形にまとめると、

となる.ここで,帰納法の仮定より $u_1' \neq \mathbf{0}, \ldots, u_k' \neq \mathbf{0}$ なので,内積の定義 (iv) から, $u_1' \cdot u_1' \neq 0, \ldots, u_k' \cdot u_k' \neq \mathbf{0}$ であることに注意する (これより,右辺の正方行列の非対角成分に現れる分母は $\mathbf{0}$ でなく,グラム・シュミットの直交化法は確かに実行可能である). 右辺に現れた正方行列は対角成分が全て $\mathbf{1}$ の上三角行列なので,その行列式の値は $\mathbf{1}$ で,正則行列である.従って, $\{u_1', \ldots, u_k', v_{k+1}, v_{k+2}, \ldots, v_n\}$ が V の基底であるとき, $\{u_1', \ldots, u_k', u_{k+1}', v_{k+2}, \ldots, v_n\}$ も V の基底となる.

 $\{u_1',u_2',\ldots,u_n'\}$ の元が互いに直交すること:

内積の定義 (i) より, $\boldsymbol{u}_i'\cdot\boldsymbol{u}_i'=0$ のとき $\boldsymbol{u}_i'\cdot\boldsymbol{u}_i'=0$ でもあるので,

任意の
$$1 \le i < j \le n$$
 に対し、 $\boldsymbol{u}_i' \cdot \boldsymbol{u}_j' = 0$ (*)

であることを示せばよい. j に関する帰納法で示す. j=2 のとき,内積の定義 (ii), (iii) より,

$$u_1' \cdot u_2' = u_1' \cdot \left(v_2 - \frac{(u_1' \cdot v_2)}{(u_1' \cdot u_1')} u_1' \right) = u_1' \cdot v_2 - \frac{(u_1' \cdot v_2)}{(u_1' \cdot u_1')} (u_1' \cdot u_1') = 0$$

より、(*)は成立する.

次に, $j=2,\ldots,k$ で (*) が成立することを仮定して,j=k+1 でも (*) が成立することを示す. つまり, $i=1,\ldots,k$ に対し, $\boldsymbol{u}_i'\cdot\boldsymbol{u}_{k+1}'=0$ であることを示す.内積の定義 (ii),(iii) より,

$$egin{aligned} oldsymbol{u}_i' \cdot oldsymbol{u}_{k+1}' &= oldsymbol{u}_i' \cdot oldsymbol{v}_{k+1} - \sum_{j=1}^k rac{(oldsymbol{u}_j' \cdot oldsymbol{v}_{k+1})}{(oldsymbol{u}_j' \cdot oldsymbol{u}_{j}')} oldsymbol{u}_j' \ &= oldsymbol{u}_i' \cdot oldsymbol{v}_{k+1} - \sum_{j=1}^k rac{(oldsymbol{u}_j' \cdot oldsymbol{v}_{k+1})}{(oldsymbol{u}_j' \cdot oldsymbol{u}_{j}')} (oldsymbol{u}_i' \cdot oldsymbol{u}_j'). \end{aligned}$$

ここで、帰納法の仮定より、i>j のとき、 $\boldsymbol{u}_i'\cdot\boldsymbol{u}_j'=\overline{\boldsymbol{u}_j'\cdot\boldsymbol{u}_i'}=0 (i\leq k$ なので)、 $i< j\leq k$ のときも、 $\boldsymbol{u}_i'\cdot\boldsymbol{u}_i'=0$ である.よって、

$$\boldsymbol{u}_i' \cdot \boldsymbol{u}_{k+1}' = \boldsymbol{u}_i' \cdot \boldsymbol{v}_{k+1} - \sum_{i=1}^k \frac{(\boldsymbol{u}_j' \cdot \boldsymbol{v}_{k+1})}{(\boldsymbol{u}_j' \cdot \boldsymbol{u}_j')} (\boldsymbol{u}_i' \cdot \boldsymbol{u}_j') = \boldsymbol{u}_i' \cdot \boldsymbol{v}_{k+1} - \frac{(\boldsymbol{u}_i' \cdot \boldsymbol{v}_{k+1})}{(\boldsymbol{u}_i' \cdot \boldsymbol{u}_j')} (\boldsymbol{u}_i' \cdot \boldsymbol{u}_i') = 0.$$

以上より、示すべきことは示された.

最後に、 $\{u_1,u_2,\ldots,u_n\}$ が V の正規直交基底であることを示す。既に $\{u_1',u_2',\ldots,u_n'\}$ が互いに直交するベクトルからなる V の基底であることを示したが、各 u_k は u_k' を単にスカラー倍したものなので、 $\{u_1,u_2,\ldots,u_n\}$ も V の基底である。さらに、内積の定義 (iii) より、

$$oldsymbol{u}_k \cdot oldsymbol{u}_k = \left(rac{1}{||oldsymbol{u}_k'||}
ight)^2 (oldsymbol{u}_k' \cdot oldsymbol{u}_k') = rac{oldsymbol{u}_k' \cdot oldsymbol{u}_k'}{oldsymbol{u}_k' \cdot oldsymbol{u}_k'} = 1.$$

また, $i \neq j$ のとき,

$$u_i \cdot u_j = \frac{1}{||u_i'||} \frac{1}{||u_i'||} (u_i' \cdot u_j') = 0.$$

以上より、確かに $\{u_1, u_2, \dots, u_n\}$ は V の正規直交基底である.

補足:岩澤分解(興味がある人向け)

上の「 $\{u'_1, u'_2, \ldots, u'_n\}$ が V の基底であること、特に各 u'_k は $\mathbf{0}$ ではないこと」の証明中に行った議論から、各 $k=2,\ldots,n$ に対して対角成分が全て 1 のある上三角行列 N_k が存在して、

$$\begin{aligned} (\boldsymbol{u}_1', \dots, \boldsymbol{u}_n') &= (\boldsymbol{u}_1', \dots, \boldsymbol{u}_{n-2}', \boldsymbol{u}_{n-1}', \boldsymbol{v}_n) N_n \\ &= (\boldsymbol{u}_1', \dots, \boldsymbol{u}_{n-2}', \boldsymbol{v}_{n-1}, \boldsymbol{v}_n) N_{n-1} N_n \\ & \dots \\ &= (\boldsymbol{u}_1', \boldsymbol{v}_2, \dots, \boldsymbol{v}_{n-1}, \boldsymbol{v}_n) N_2 \cdots N_{n-1} N_n = (\boldsymbol{v}_1, \dots, \boldsymbol{v}_n) N_2 \cdots N_{n-1} N_n \end{aligned}$$

となることがわかる。ここで、対角成分が全て 1 の上三角行列の積は再び対角成分が全て 1 の上三角行列となることから、 $N':=N_2\cdots N_n$ とすると、N' は対角成分が全て 1 の上三角行列で、

$$(\boldsymbol{u}_1',\ldots,\boldsymbol{u}_n')=(\boldsymbol{v}_1,\ldots,\boldsymbol{v}_n)N'$$

と書けることがわかる. さらに、 $N:=(N')^{-1}$ とすると、Nも対角成分が全て1の上三角行列で、

$$(\boldsymbol{v}_1,\ldots,\boldsymbol{v}_n)=(\boldsymbol{u}_1',\ldots,\boldsymbol{u}_n')N$$

である. 次に,

$$A := egin{pmatrix} ||oldsymbol{u}_1'|| & & & & \ & ||oldsymbol{u}_2'|| & & & \ & & \ddots & & \ & & & ||oldsymbol{u}_n'|| \end{pmatrix}$$

とすると,

$$(\boldsymbol{u}_1',\ldots,\boldsymbol{u}_n')=(\boldsymbol{u}_1,\ldots,\boldsymbol{u}_n)A$$

である. 以上より,

$$(\boldsymbol{v}_1,\ldots,\boldsymbol{v}_n)=(\boldsymbol{u}_1,\ldots,\boldsymbol{u}_n)AN$$

となる. この事実を V が \mathbb{K}^n ($\mathbb{K}=\mathbb{R}$ or \mathbb{C}) の場合に考えてみよう. すると,

- \mathbb{K}^n の基底 $\{v_1,\ldots,v_n\}$ を並べてできる n 次正方行列 (v_1,\ldots,v_n) \Leftrightarrow 正則行列.

という対応があったので、上の考察から以下の定理が言える:

- 定理 (岩澤分解) —

任意の実正則行列 $X_{\mathbb{R}}$ に対し、ある直交行列 O,正の対角成分を持つ対角行列 A,対角成分が全て 1 の実上三角行列 $N_{\mathbb{R}}$ が存在して,

$$X_{\mathbb{R}} = OAN_{\mathbb{R}}$$

と書ける.

また,任意の複素正則行列 $X_{\mathbb C}$ に対し,あるユニタリ行列 U,正の対角成分を持つ対角行列 A',対角成分が全て 1 の複素上三角行列 $N_{\mathbb C}$ が存在して,

$$X_{\mathbb{C}} = UA'N_{\mathbb{C}}$$

と書ける.